マイスターのささやき「レンタカーで巡る 世界遺産！」

大阪府豊中市　世界遺産マイスター　森瀬　英司

◇第２話　「隊商都市ペトラ」（ヨルダン・ハシェミット王国）

ハリソン・フォード主演映画『インディ・ジョーンズ』のような世界。
狭い赤岩の裂け目“シーク”を抜けると広がる、砂漠の景色。
いつかは辿り着きたいと願っていた、その場所こそが、ペトラ遺跡でした。

商社員として勤務しながら、暇をみては色々な国を巡った私は、引退を記念する訪問国として、ヨルダン・ハシェミット王国（以下ヨルダン）を選びました。
プランニングの段階では、アラブ首長国連邦のドバイを起点として、中東諸国を周ろうと考えていましたが、各国の紛争問題や諸条件などを考慮して、ヨルダンのみの訪問を決めたのでした。
家族や友人から、治安は大丈夫なのかと、しつこく心配されました。実際には行ってみないと分かりませんし、ヨルダンは昔から親日国家とされているので、きっと何とかなるだろうと、自分に言い聞かせているうちに、出発日を迎えました。

９月中旬、首都アンマンのクイーン・アリア国際空港に到着しました。日本人は、入国審査時に簡単な質問に答える程度で、ビザが無料で発給されますので、実質ノー・ビザと言えるかもしれません。
私の旅は、レンタカーをできるだけ有効活用し、自由気ままな時間を過ごすことを原則としています。ヨルダンでも、さっそく、レンタカー会社に向かい、手続きを済ませました。ところが、ＧＰＳの取り扱いがなく、『地球の歩き方』の地図だけでは少々不安が過ぎりました。
空港すぐ近くの駐車場に案内され、車に乗り込んだ途端、「E マーク」が点灯。ガソリンがほとんど入っていなかったのです！　レンタカー会社の担当係が、すぐにガソリンを入れてくれと言いますが、ガス・ステーションの場所なんて、分かるはずもありません。こんなことは初めてでした。かつてモンテネグロでは、ガソリンが半分しか入っていないことはありましたが……。係に交渉して、私の車を３㎞ほど離れた、ガス・ステーションまで先導させ、なんとか事なきを得ましたが、中東では何が起こるか分からないと、冷や汗を感じました。ちなみに、レンタカーは「E」の状態で返却しましたが、「Ｅ」にするために調整しながら走らせた砂漠の道中は、至難の連続でした。

シーズンオフのためか、走行車の少ないハイウェイを走らせて、約１時間。夕暮れが近づいた頃には、死海を臨むリゾートホテルに、無事に到着しました。

翌日、恐る恐る死海に浮かびながら、高濃度の塩の力を実感しました。とはいえ、顔を付けてはならない、目に入れてはならない、20 分間を限度に上がらなければならない、と注意書きが多く、海水に浸かる前から勇気が必要ですし、海水から上がった後も、真水でしっかりと体を洗い流さなければなりませんでした。

午後は、陸地にありながら海抜マイナス 420m ともなる、この死海の“地の底”から、山脈を越えて、ペトラ遺跡に向かいました。途中の集落では分岐路が多いため迷い、人に訊きながら（皆、親切に教えてくれますが、言うことが違います）、とにかく南に進みました。そして、約 200km の道程を、予定より 1 時間ほど遅れて、ペトラ遺跡の玄関口であるワディ・ムーサの街に到着しました。明日の遺跡巡りに備え、暑さ対策に水と、頭に巻くカフィーヤを購入しましたが、ペトラの物価はヨルダンでも一番高くて驚きました。また、レストラン（ホテル内は OK）ではお酒を呑めませんが、街中でビールを出してくれるお店を 1 軒だけ見つけました。さっそく注文したビールは乾いた喉を潤してくれましたが、 1 缶約 1,200 円の値段に、またまたびっくりしました。さらに、店主からビール缶を他の客に見せないようにと言われる始末。やはり、酒呑みは肩身の狭い、イスラムの国です。一方、死海からここまでの道中を話題にすると、「まさか自分で運転してきたのか！」と、店主にとても驚かれました。ここでは外国人が運転することが珍しいのでしょうか？

ところで、ヨルダンは、イスラエルやシリア、イラクなどの紛争地に囲まれていて、ハイウェイを運転していると、たびたび　警察や軍による検問を求められます。検問の順番を待ちながら様子を窺ってみると、車の後ろトランクを開けられたり、車体の下にミラーを入れられたりと、緊張感が伝わってきます。えらいことやなぁと思っているうちに、ついに私の番が来ました。パスポートを提示すると、表紙だけで「Welcome to　Jordan！」と笑みを返されて、終了。あれこれ考えていたのに、拍子抜けです。至る所で何度も検問を受けましたが、善人に思われたのか、日本人だからか、すべてスムーズに通ることができました。いずれにせよ、日本国籍のパスポートの力が強大であることを、あらためて実感しました。

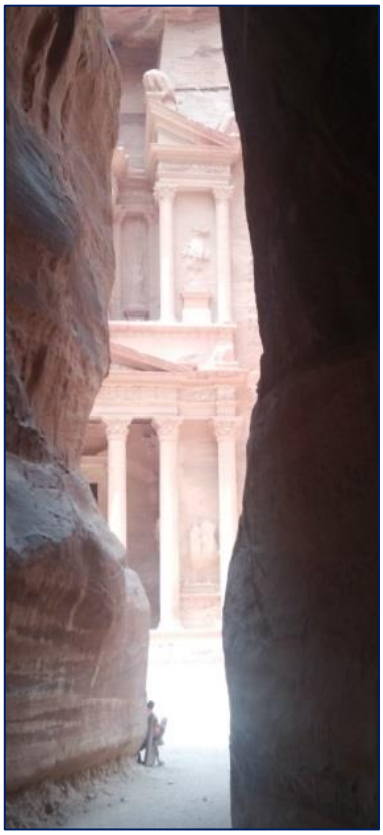
翌日、朝食を終えた後、ペトラ遺跡のゲートに向かいました。他の外国人宿泊者たちも早々にホテルを出発し、どうやら午前中の涼しい内にとの考えは、私と同じのようです。ペトラ遺跡の入場料は、現金のみ受付の JD50（約 8,000 円）。ドイツ人グループがホテルに戻って、ＡＴＭでドローウィングしてくると、苦笑していました。高い入場料が保全・保護に活用されているのか、それとも、押し寄せる観光客を制限させるためなのか（確かに、バックパッカーたちをあまり見かけませんでした）、日本の世界遺産でも参考になる良い例となるかもしれない、と考えを巡らせながら、立派なゲートをくぐりました。

ペトラ遺跡は、総面積約 900 ㎢の山岳地帯に点在する、岩山に刻まれた壮大な建物や用水路などで構成されています。前 2 世紀頃、ここに砂漠の遊牧民であったアラブ系ナバタイ人がナバテア王国を興しました。当時は大いに繁栄したものの、やがて交易ルートから外され、 2 世紀初頭にはローマ帝国の支配下に置かれました。４～５世紀にはキリスト教教会が造られ、 7 世紀頃にはイスラム教徒の影響を受けました。12 世紀に十字軍の城塞が築かれたのを最後に、長らく廃墟となって砂に埋もれていましたが、19 世紀初頭にスイス人学者ヨハン・ルートヴィッヒ・ブルクハルトにより再発見されました。以来、 2 世紀近く発掘調査が続けられているものの、全容は明らかになっていません。

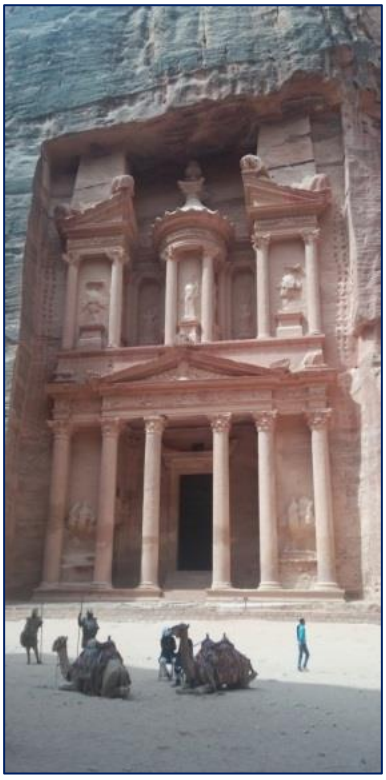
今回は数多あるトレッキングルートの中から、メインルートの、カズネ・ファウルンからエド・ディルを目指しました。遺跡内は基本的には徒歩ですが、足場が悪く、急坂もあるので、タクシー利用も可能ですし、馬やロバ、ラクダ、馬車に乗ることもできます。もちろん、中東特有の“客引き攻め”にも遭遇します。

ベドウィンたちの貴重な現金収入となるので、断るのも一筋縄ではいかない、執拗さです。しかし、この交渉を楽しんでいる人たちも、結構いるようです。

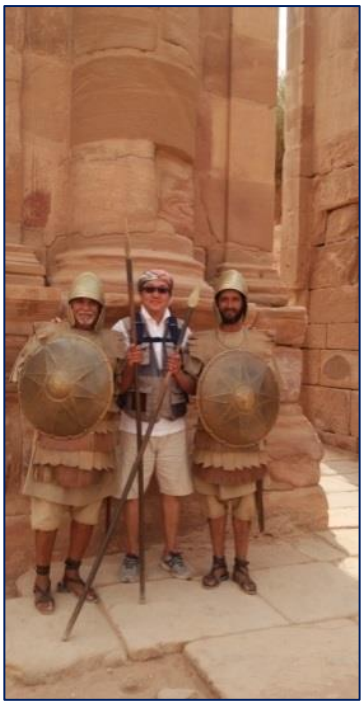
　ペトラ遺跡のハイライトである、カズネ・ファウルン（ファラオの宝物殿）まで、歩いて約１時間。狭い岩山の裂け目であるシーク入口まで、ほぼ平坦ですが、石がゴロゴロとした、歩行に難渋する道です。このシークの岩壁に沿って造られた水路や水道管にみられる水利システムは、高度な技術と知恵が明らかです。砂漠環境の必要性から整備されたものですが、紀元前に隆盛したナバタイ王国をたいへん興味深く、驚くばかりでした。



断崖絶壁の間、約 1,200m余りのシークを抜けると、
いよいよお待ちかね。
シークの隙間から徐々に、
カズネ・ファウルンの全貌が現れてきます。
ジャ～ン！
インディ・ジョーンズと同じ気持ちで、胸が高まります。

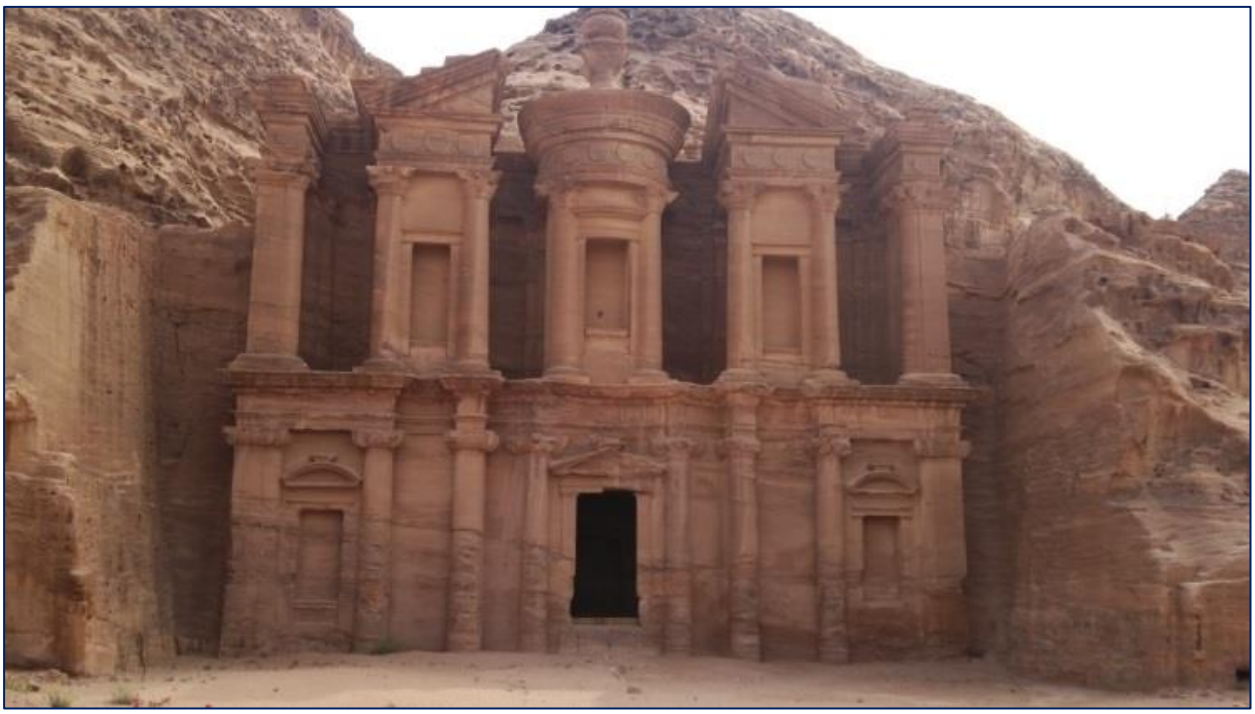


カズネ・ファウルンは葬祭殿または墓であったとされていますが、
赤茶けた岩の精緻な彫刻は
エジプトやギリシアの影響が見られる様式です。
ひとつひとつの造形を見上げているとその美しさに、
そして、太陽の光に照らされることで神秘性の増す、
何とも言えぬ素晴らしい光景でした。
内部に入れなかったことは残念でしたが、
ナバタイ人の死生観に触れた気がしました。



いくつもの岩窟墓を両側に見ながら、石がゴロゴロとした道を進み、
ローマ時代の円形劇場や繁栄を極めた
ペトラの中心街、大神殿へと到着しました。
ここでナバタイ人の戦士に扮したベドウィンたちの歓待を受けました。
写真のように、当時はきっとこのような格好で
異邦人と戦ったに違いありません。
ペトラ創設から十字軍の遠征までの歴史の変遷を辿りながら、
しばし日陰で休憩。
とにかく暑くて水が飲みたい！

ここからは、荒涼とした茶一色の土漠の急坂を登ることになるので、
タクシーの客引きたちの声にも熱がこもります。
それらを振り切ると、
今度は土産物屋からひっきりなしに声が掛かりますが、
耳を貸さないようにして、（商品はみんな砂埃だらけです……笑）、
歩を進めていきます。
息を切らして急坂を攻めること、約１時間。
ペトラ遺跡の最奥地にあるエド・ディル（修道院）に到着しました。



エド・ディルはペトラで最も大きいモニュメントですが、カズネ・ファウルンと比較すると、装飾はいたってシンプルでした。その建設目的は、墓ではなく、王を祭った神殿だったと伝えられています。ビザンチン時代には壁には十字架が彫られ、教会修道院として利用されました。エド・ディルの前は広場になっており、そこの洞窟カフェでミント・ティーを飲みながら、この時代のキャラバンのように、ラクダに跨る自分の姿を妄想していました。

ペトラの全貌は未だ明らかにされず、世界遺産とともに世界の新・七不思議にも選ばれています。
その不思議さと神秘さが、世界中からの観光客を惹きつけるのでしょう。高額な入場料によって、
遺跡の保全・保護と遺跡内に定住するベドウィンたちの生活を守る点は、日本の世界遺産の、今後の姿を
示唆しているようだと感じながら、真っ赤に染まる夕闇の中、遺跡を後にしました。

☆小さなささやき（余談）

中東ヨルダンを運転していて……
砂漠や土漠の中でも、道路はきちんと整備され、
最大片側３車線、合計６車線が確保されています。
路面状況は決して良くないと思いますが、特殊な舗装をしているのか、
ヨルダンの人達はかなりのスピードを出して走ります。
標識は、基本的には英語で表示されているので不自由はありませんでしたが、
イラクやサウジアラビアの地名がアラビア語で出てくると、
この道がはたして合っているのか、緊迫します。
また、ヨルダンは、治安が保たれているとはいえ、
時々天井に銃を格納できる pickup トラックを見かけると、
やはり戦場と隣り合わせの地であることを、あらためて実感しました。

以上